

# PBL を健康教育に導入したことによる高校生の 態度への影響

高橋 進\*、森 英也\*\*、鈴木 明\*、佐藤 真太郎\*  
鹿島 丈博\*、瀧澤 雄太\*

\* 大東文化大学,

\*\* 群馬県立伊勢崎興陽高校

## The Influence on Attitude in High School Students by Introducing PBL to Health Education

Susumu TAKAHASHI, Hideya MORI, Akira SUZUKI, Shintaro SATO  
Takehiro KASHIMA, Yuta TAKIZAWA

### Abstract

【Purpose】 As a problem of the current situations in school Health Education, it is said that “Health and Physical Education teacher only remained in mealy the commentary on textbooks at the time of class”. Therefor the purpose of this study was to investigate the influence on attitude in high school students by introducing PBL to Health Education.

【Methods】 Subjects were 2nd grade high school students (5 classes, total 184 students). The unit name of the lesson which was allocated 3 hours was "work and health". Before the first lesson, 30 topics on attitude toward Health Education were measured by questionnaire which consist of four pieces choice. Obtained data were analyzed by factor analysis. It was extracted 5 factors. After 2 hours lessons, it was surveyed to the same subjects by similar questionnaire. For confirming the efficient of PBL on students' attitude toward Health Education, it was compared each factor scores of 1st questionnaire and 2nd one by paired t-test. By the way, the procedure of the lesson was as follows; 1) Making a group of 4 or 5 people. 2) Creating questions in each group. 3) Interviewing to each family on using that question. 4) Analyzing the result of interview. 5) Presentation the results of consideration.

### 【Conclusion】

- 1) Even before class, it was suggested that the students evaluated Health Education highly.
- 2) It was suggested that introducing PBL to Health Education made attitude in high school students changed to desirable direction.

## I. 緒言

シンポジウム『「保健体育科における保健授業の現状と改善の方策」について』の中で、杉山<sup>7)</sup>は、保健授業の教師側の課題として、「実際の授業において教科書の解説の終始になってしまっていたり、経験談の語りや黒板に書きまくる授業展開が多いことであったり、年間の授業が全て課題学習のみであったり、生徒の学習態度が悪いと生活指導に授業がシフトしてしまったりということが往々にしてみられる」などを指摘している。

財団法人日本学校保健会「保健学習推進委員会」による、保健学習推進上の課題を明らかにするための全国的な実態調査<sup>2)</sup>によれば、『児童生徒の多くは、保健学習が「大切」だと回答しているものの、「好き」「楽しい」あるいは「考えたり工夫したりできた」とは思っていない』と結論付けている。

ところで、従前の学習指導要領<sup>3) 4) 5)</sup>によれば、学校における保健学習の役割は、以下のように纏められる<sup>1)</sup>。

「保健学習は、健康・安全に関する基礎的・基本的な内容を生徒が体系的に学習することにより、健康問題を認識し、これらを科学的に思考・判断し、適切に対処できるようにすることをねらいとしており、生涯を通じて健康で安全な生活を送るための基礎を培う上で中心的な役割を担っている。」

上述したように、「保健学習」の重要性を生徒・児童が認識していることは、その役割を既に生徒・児童が理解していることでもある。しかしながら、やはり既述したような保健授業の課題が現存している以上、教科学習としての「楽しさ」「遣り甲斐」を享受することは望めない。従って、「健康に関わる諸問題を認識し、科学的に思考・判断し、適切に対処できるようにする」といった保健学習のねらいを達成することへの高いハードルが現存すると言わざるを得ない。

一方、教育基本法「第一章 教育の目的及び理念」(教育の目的)第一条では、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」としているが、保健の系統的・効果的な学習は、正に「心身ともに健康な国民の育成」の実現のために重要であることに異論を唱える者はいない。

他方、従前の学習指導要領(平成20年3月・平成21年3月施行)においても、教育基本法の教育の目的を実現するために掲げられた理念である「生きる力」の涵養を軸として大幅な改定が進められた。その詳細については、ここでは割愛するが、平成29年3月に公示された新学習指導要領<sup>6)</sup>では、教育の理念や目標が更に明確に位置付けられたことは周知のとおりであり、その理念の遂行によって「何ができるようになるか」を以下の様に明らかにした。

知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理。

既述したように、保健の学習のハードルをクリアすることができれば、「健康に関わる諸問題を認識し、これらを科学的に思考・判断し、適切に対処できる」という保健学習のねらいの達成をとおして、学習指導要領における使命の達成を補助することは言うまでもない。何れにしても、保健学習の重要性は明らかであり、現状の課題を早急に解決することは必至であると言える。

そこで本研究では、保健学習の方法として、「①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱」全ての“ねらい”を凌駕するであろうPBLを授業導入することとし、単元前後の保健の授業に対する生徒の態度変容を学習評価の一尺度とし、因子分析的手法を用いてその差異を明らかにするとともに、PBL型保健授業の有効性を検討することを目的とした。

尚、PBLとは、ジョン・デューイ（アメリカの教育学者）が提唱した学習理論であり、学習を能動的なものであると位置付け、主体的に問題を発見し解決していく能力の涵養を目指す学習方法であり、アクティブ・ラーニングに代表される。また、学習指導要領で示されるアクティブ・ラーニングの定義は、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」としていることは周知のとおりであり、「何を教えるか」という知識の質・量の改善、並びに「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視していることは言うまでもない。知識・技能の定着はもとより、学習意欲を高めるうえでも効果的であることに異論をはさむ余地もあるまい。

また、本研究で対象とする単元としては、第二学年「社会生活と健康」の領域、「職業と健康」に充てる2時間とし、後に示す指導計画のとおり学習を進めることとした（資料1、2参照）。

#### 学習の目的

「職業と健康」の単元において現代社会の課題ともいえる「働き方と健康」について身近な労働者へのインタビューをすることにより学習を深め、将来健康的な職業生活を送るための資質や能力を向上させる。また、1学年で学習した教科「現代社会」や「産業社会と人間」の授業では、キャリア教育について学習している。1学年で学習した内容を基盤として、特に健康に焦点を当てた学習内容である本単元を学習することにより、勤労観や職業観の涵養が期待できる。

## II 研究方法

### 1. 調査対象者

群馬県立I高等学校に在籍する2学年5クラスの生徒計184名。

### 2. 調査期日

2018年1学期中に「保健」で取り上げられる単元「職業と健康」の授業前、並びに2時間の授業（指導案資料2参照）終了直後の2回、質問紙法により実施。

### 3. 調査方法

1) 質問紙の内容は、「保健」の授業に対する意識を問う30項目とし、「大変感じる・4」から、「全

く感じない・1」の4件法で回答を求めた。

2) 授業実施方法は、以下のとおりとし、PBLの授業形態で単元を進めた。

- ①各授業クラスで、4人から5人のグルーピング。
- ②各グループで、家族へインタビューする質問を作成。
- ③その質問を使用して各家族にインタビューの実施。
- ④インタビュー結果の分析と検討。
- ⑤検討結果のプレゼンテーション。

3) 「職業と健康」の授業前に実施した質問紙調査で得られたデータをもとに、その態度を構造的に捉えるために、各項目の評定値に対し、因子の抽出に関して主成分分析を用いた因子分析を施した。その結果、固有値1.0以上である因子は5因子抽出された。更に、得られた因子行列に対してバリマックス回転を施し、因子の解釈に際しては、因子負荷量0.4以上の項目を有効とした。

4) 3) で得られた各因子に含まれる各項目の評定値の合計を項目数で除した値の平均値を各因子尺度得点とした。

5) PBL型授業前後の各因子尺度得点の比較検討を、対応のあるT検定を用いて試みた。尚、因子に含まれる項目が、因子の解釈・命名の方向と反転する場合には、その項目の評定値について、予め4点を1点へ、1点を4点へと変数の変換を行った。

以上、本研究による全ての計算処理は、IBM SPSS Statistics 21 for Windowsによって行われた。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 「保健」の授業に対する因子構造

バリマックス回転後の抽出因子及び因子負荷量については、表2に示した。

この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は5因子(表1参照)、解釈・命名可能な因子も5因子であった。

尚、因子の解釈・命名については、因子負荷量0.4以上の項目とした。内訳については、以下のとおりである。

表1. 相関行列の固有値(回転前)

因子	固有値	貢献度(%)	累積貢献度(%)
F1	10.801	36.003	36.003
F2	3.294	10.980	46.983
F3	2.472	8.241	55.224
F4	1.749	5.829	61.053
F5	1.110	3.700	64.753

表 2. 回転後の成分行列<sup>a</sup>

	成分				
	F1	F2	F3	F4	F5
楽しく感じる	.471	-.336	.090	-.025	.540
生活有益性	.536	.019	.082	.511	.131
他教科関連性	.385	.077	.303	.005	.530
志望大学入学に必要	.194	.053	.762	.175	.044
志望就職に必要	.319	.023	.808	.091	-.008
就職希望内容	.258	-.052	.797	-.010	.033
健康知識享受	.439	.002	.192	.681	-.002
健康維持に有益	.546	-.093	.093	.634	-.041
豊かな心の涵養に寄与	.765	-.115	-.106	.236	.015
健やかな身体養成に寄与	.734	-.135	-.158	.309	-.105
日本国民の健康維持に有益	.713	-.090	-.094	.473	-.009
日本国民の安全な生活を担保	.704	-.052	-.068	.423	.112
青年の悩み解決に寄与	.738	-.099	.055	-.002	.178
他者理解へ寄与	.747	-.026	.074	-.054	.138
社会生活への深化への寄与	.754	.032	.138	-.213	.124
男女参画意識の深化への寄与	.762	-.100	.164	-.011	-.018
コミュニケーション能力の涵養	.716	-.145	.159	-.381	.037
生命尊重への意義に対する意識享受	.752	-.042	-.034	.078	-.053
安全な生活態度確立への寄与	.794	-.015	-.008	.077	-.179
規律ある生活確立への寄与	.768	.040	-.026	-.073	-.066
国際理解への深化への寄与	.727	-.066	.239	-.210	-.014
世界的環境問題への理解への寄与	.676	-.049	.213	-.123	.044
希望職種への有益性	.469	-.055	.646	-.134	.064
家族を持つために有益	.562	-.043	.119	.364	-.168
無駄に感じる	-.169	.716	-.116	-.067	.275
退屈に感じる	-.251	.810	.030	.012	-.135
苦痛に感じる	-.153	.854	-.057	-.031	-.131
難しく感じる	.000	.466	.043	-.026	-.656
受動的	-.125	.674	.181	.071	-.105
やりたくない	-.229	.822	-.068	-.057	-.030

因子抽出法: 主成分分析

回転法: Kaiser の正規化を伴うクォーティマックス法

a. 6 回の反復で回転が収束した。

- (1) 第一因子については、「楽しく感じる」「健康維持に有益」「豊かな心の涵養に寄与」「社会生活の深化への寄与」「家族を持つために有益」など、保健授業の社会生活に及ぼす肯定的・効果的な諸側面を示す 20 項目が高い負荷量であった。従って、この因子を「肯定的効果因子」と命名した。
- (2) 第二因子においては、「無駄」「退屈」「苦痛」「難しい」「受動的」「やりたくない」などが高い負荷量を示した。これらは、全て保健授業に対する否定的な感情を示唆している。よってこの因子を「否定的感情因子」と命名した。
- (3) 第三因子に高い負荷量を示した項目は、「志望大学入学に必要」「志望就職に必要」「就職志望内容」「希望職種への有益性」の 4 項目であった。それぞれの項目が「将来の進路」への有益性を示していることから、この因子を「進路有益性因子」と命名した。
- (4) 第四因子については、「生活有益性」「生活知識享受」「健康維持に有益」「日本国民の健康に

有益」「日本国民の安全な生活を担保」に高い因子負荷量を示した。また、それぞれアンケート回答者を含む国民の健康維持への有益性と担保性を示唆している項目ということもできる。従って、この因子を「国民健康担保因子」と命名した。

- (5) 第五因子は、「楽しく感じる」「難しい」「他教科関連性」の3項目に高い因子負荷量を示した。これらは、いわば保健授業への親密性を示す項目と捉え、「保健授業親親密性因子」と名付けた。但し、この因子の平均尺度得点の算出の際には、「難しい」の評価を反転させることとした。

## 2. 「保健授業」の各因子尺度の評価と授業による態度変容

表3には、単元前後の各因子尺度得点と得点間のT検定の結果を示している。

まず、高校生の保健授業に対する感情的側面や認知的側面に対する評価に関しては、授業前の因子尺度得点の結果から、次のようなことが明らかとなった。

- (1) 保健授業に対する否定的な感情については【2.2086±.52827(点)】、決して高くなく、むしろ保健の授業で享受される知識や情報は、社会生活にとって有益であると認知【2.7724±.42994(点)】されていることが示唆された。
- (2) 更には、日本国民の身体的・精神的健康を維持・増進していくための教科として、保健授業の果たす役割の意味を確実に認知している【3.1609±.51829(点)】ことが示唆された。
- (3) 保健の授業の持つ、他の関連との親和性や【2.5145±.50478(点)】、将来の進学、就職などに与える影響【2.3995±.68509(点)】に関する認識は中庸であった。

表3. T-testの結果

因子	調査時期	平均	N	S. D.	有意差
F 1: 肯定的効果因子	before	2.7724	183	.42994	P<.001
	after	2.9268	183	.49107	
F 2: 否定的感情因子	before	2.2086	183	.52827	P<.05
	after	2.2832	183	.57952	
F 3: 進路有益性因子	before	2.3995	184	.68509	P<.01
	after	2.5041	184	.70395	
F 4: 国民健康担保因子	before	3.1609	184	.51829	NS
	after	3.2043	184	.66017	
F 5: 保健授業親親密性因子	before	2.5145	184	.50478	NS
	after	2.4728	184	.56123	

以上から本研究の調査対象者における保健授業に対する態度評価が示唆されたが、財団法人日本学校保健会「保健学習推進委員会」が示している保健授業に対する二側面の意識<sup>2)</sup>(「大切」であると感じている認知的側面の高い評価、「好き」「楽しい」という感情的側面の低評価)のうち、認知的側面に関しては十分再支持する結果となったが、感情的側面に関しては決して悲観する結果とはならなかった。

勿論、本研究がPBLの効果を検証するための臨床的な研究であることにより、十分な調査数を確保できなかったため、本結果を一般化することは無理があるかも知れない。また、PBLの授業を受け入れ推進しようとする、調査校の保健体育科や学校自体の風土が影響している可能性は否め



ない。したがって調査対象校や調査視点を増やすことが今後の研究課題であることは明白である。

次に、それぞれの高校生の保健授業の前後に対する感情的側面や認知的側面に対する因子評価尺度得点の比較から以下のことが示された。

- (1) 保健の授業で享受される知識や情報は、社会生活にとって有益であると認知される傾向【2.7724 ± 42994 (点) ⇒ 2.9268 ± 49107 (点)・0.1%水準での統計的に有意な変容】や、将来の進学、就職などに与える影響【2.3995 ± 68509 (点) ⇒ 2.5041 ± 70395 (点)・1%水準で統計的に有意な変容】に関する認識については、授業後に有意な好変容を示した。
- (2) 保健授業に対する否定的な感情については、授業後についても保健授業を否定する評価【2.2086 ± 52827 (点) ⇒ 2.2832 ± 57952 (点)】ではないものの、統計的に5%水準でマイナス方向への有意な変容を来した。

以上のような結果を得られたが、PBLを導入した本研究の保健授業形態が、仮に生徒にとって「否定的感情因子」に含まれる感情（「無駄に感じる」「退屈に感じる」「苦痛に感じる」「難しく感じる」「受動的」「やりたくない」）を助長させるものであったとするならば、授業後の感情的評価【2.2832 ± 57952 (点)】は、更に大きなマイナス変容を来したに違いない。逆に、PBL型授業形態によって、生徒の期待や好感情が維持されるとともに、上記(1)の結果が示しているように、更に高い効果的認知形成がなされたと言っても過言ではない。

以上から、保健授業にPBL型保健授業を導入することで、高校生の保健授業に対する態度を好意的、効果的方向に変容させることが示唆されるとともに、その有効性の一端が明瞭となった。

今後は、今回調査対象単元として取り上げた「職業と健康」以外の単元や調査対象校を広げる、あるいはPBL授業計画そのものを精査するなど、PBL授業の有効性・有益性を更に検証することとしたい。

#### IV まとめ

本研究では、「①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱」全ての“ねらい”を凌駕するPBLを保健授業に導入し、単元前後の保健の授業に対する生徒の態度変容を学習評価の一尺度とし、因子分析的手法を用いてその差異を明らかにするとともに、PBL型保健授業の有効性を検討することを目的とした。

得られた結果は以下の如くである。

- (1) 因子分析の結果、「肯定的効果因子」「否定的感情因子」「進路有益性因子」「国民健康担保因子」「保健授業観親密性因子」の5因子が抽出・命名された。
- (2) 保健授業に対する否定的な感情については決して高くなく、むしろ保健の授業で享受される知識や情報は、社会生活にとって有益であると認知していることが示唆された。
- (3) 日本国民の身体的・精神的健康を維持・増進していくための教科として、保健授業の果たす役割の意味を確実に認知していることが示唆された。
- (4) 保健の授業の持つ、他の関連との親和性や将来の進学、就職などに与える影響に関する認識

は中庸であった。

- (5) 保健の授業で享受される知識や情報が、社会生活にとって有益であると認知される傾向や、将来の進学、就職などに与える影響に関する認識については、授業後に有意な好変容を示した。
- (6) 保健授業に対する否定的な感情については、授業後についても、決して、保健授業を否定する評価ではないものの、統計的に5%水準でマイナス方向への有意な変容を来した。
- (7) 保健授業にPBL型保健授業を導入することで、高校生の保健授業に対する態度を好意的、効果的方向に変容させることが示唆されるとともに、その有効性の一端が明瞭となった。

**【引用・参考文献】**

- 1) 神奈川県立体育センター「保健学習ハンドブック〈改訂版〉」2012.3.  
(<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/432576.pdf>)
  - 2) 公益財団法人日本学校保健会「中学校の保健学習を着実に推進するために」保健学習授業推進委員会 平成25年度報告書, 2013.9.  
([https://www.gakkohoken.jp/book/ebook/ebook\\_H250010/H250010.pdf](https://www.gakkohoken.jp/book/ebook/ebook_H250010/H250010.pdf))
  - 3) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 体育編」2008.8.
  - 4) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育編」2008.9.
  - 5) 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」2009.12.
  - 6) 文部科学省「告示 中学校学習指導要領」2017.3.
  - 7) 杉山正明「シンポジウム・保健体育科における保健授業の現状と改善の方策」日本体育学会第67回大会, 2016.  
([https://www.jstage.jst.go.jp/article/jspehss/67/0/67\\_65\\_2/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jspehss/67/0/67_65_2/_article/-char/ja/))
- \* 尚、本研究の一部は、THE 23rd ANNUAL CONFERENCE OF EAST ASIAN SPORT AND EXERCISE SCIENCE SOCIETY (2018.8.8)にて学会発表。

(2019年9月26日受理)



資料1 指導計画

## 2 学年保健「働くことと健康」指導計画

### 学習の目的

職業と健康の単元において現代社会の課題ともいえる「働き方と健康」について身近な労働者へのインタビューをすることにより学習を深め、将来健康的な職業生活を送るための資質や能力を向上させる。

また、1学年で学習した教科「現代社会」や「産業社会と人間」の授業では、キャリア教育について学習している。1学年で学習した内容を基盤として、特に健康に焦点を当てた学習内容である本単元を学習することにより、勤労観や職業観の涵養が期待できる。このことについて学習前後のアンケート調査により意識変容を計る。

### 学習方法（グループ学習）

- 1 「身近な労働者への質問づくり」
- 2 各家庭での質問
- 3 質問と回答
- 4 考察内容について発表する

### 具体的手順

- 1 身近な労働者への質問づくり
  - 1) グループ作り
    - ①グループの人数は5名とする
    - ②司会と記録の役割を決める
  - 2) 質問作り
    - ①自分たちの質問を作り出す
      - ・できるだけたくさんの質問を出す
      - ・話し合ったり、評価したり、答えを言ったりしない
      - ・発言の通りに質問を書き出す。
      - ・肯定文として出されたものは質問形式に転換する
    - ②作り出した質問を改善する
      - ・書き出された質問の中で「はい」「いいえ」で答えられる質問は説明が必要な質問に換える
    - ③質問に優先順位をつける
      - ・作り出した質問の中から共通質問項目として優先順位の高い質問を3つ選ぶ
      - ・優先順位の高い理由を示す。
  - 2 各家庭でのインタビュー
    - 1) 家族の中で生計の中心となる父親か母親などに質問をする。
    - 2) 質問は共通項目は必ず行う。
    - 3) その他にグループで出された質問から選んで行う。

### 3 質問と回答の分類

- 1) 各グループで質問をグループ化する。
  - ①労働中のけが（労働災害）に関すること。
  - ②労働が原因となる病気（職業病）に関すること。
  - ③労働時間に関すること。
  - ④メンタルヘルスに関すること。
  - ⑤ワークライフバランスに関すること。
  - ⑥働くことの意義に関すること
  - ⑦その他
- 2) 各グループの質問と回答を集約する。
- 3) 分類した結果から、どのようなことが学べたか考察する。

### 4 考察内容について発表する（時間があれば）

- 1) グループ化した質問と回答を模造紙にまとめる。
- 2) 考察を発表し、考え方について共有する。

資料2 指導案

「働くことと健康」指導案1

	学習活動	指導上の留意点と評価
導入	<p>現代社会の教科書 p 180 の「労働問題と労働者の権利」の資料を配付する。</p> <p>働くことと健康（教科書 P 104～105）を読む。</p>	<p>1年次に電通の社員が自殺したニュースから「働き方」の学習をしたことを確認する。</p> <p>保健では「働き方」の中で健康に係わる分野の学習をすることを理解させる。</p>
展開	<p>グループ学習 「身近な労働者への質問づくり」</p> <p>① 5人のグループを作り、司会と記録を決める。</p> <p>② 「働くことと健康」についての質問を作る</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・できるだけ多くの質問を作る</li> <li>・話し合ったり評価をしたりしない</li> <li>・発言の通りに質問を書き出す。</li> </ul> <p>③ 作り出された質問を改善する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出された質問が「はい」「いいえ」で答えられる質問は説明が必要な質問に換える。</li> <li>・肯定文として出された質問は質問形式に換える</li> </ul> <p>④ 質問に優先順位をつける</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作り出された質問から共通質問項目として優先順位の高い質問3つ選ぶ</li> <li>・優先順位の高い理由を示す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問を数多く作り出すことで「働き方と健康」に対する思考が拡散し、働き方への考え方が広がるようにする。</li> <li>・数多くの質問を作り出すことを【関心】【意欲】として評価する。</li> <li>【記録用紙1】を配布し、一部提出用とする</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・質問に優先順位をつけることにより「働き方と健康」に対する思考が収束され、働き方と健康への整理ができるようにする。</li> <li>・優先順位の理由を示すことを【思考】として評価する</li> </ul>
まとめ	<p>共通質問の3つの他にグループで出された質問の中から選ぶ</p>	<p>次の授業までにそれぞれの家庭で家族にインタビューすることを理解させる。 (家族へのインタビュー用紙配布)</p> <p>家庭に複数の労働者がいる場合には生計の中心となる人にインタビューする。</p> <p>現在、労働者がいない場合には、過去の働いていた人にインタビューする。</p>

「働くことと健康」指導案2

	学習活動	指導上の留意点と評価
導入	<p>グループ学習</p> <p>各家庭でのインタビューをして、感想を発表する。</p>	<p>自分の感想と全く違う感想は記録させる。</p>
展開	<p>グループ学習</p> <p>質問と回答の分類</p> <p>①グループの質問を付箋に書き写す。</p> <p>②前回作った質問をグループ化すること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・労働中のケガに関すること</li> <li>・労働が原因でおこる病気に関すること</li> <li>・労働時間に関すること</li> <li>・メンタルヘルスに関すること</li> <li>・ワークライフバランスに関すること</li> <li>・働くことの意義に関すること</li> <li>・その他</li> </ul> <p>以上の項目が書かれた7枚のA4用紙にグループに付箋を貼り付けてグループ化する</p> <p>③付箋が貼られているところに自分がインタビューしてきた回答を書き入れる</p> <p>④分類した結果について考察する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちが知りたいと思ったことどのような項目であったか考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問をグループ化することにより働き方に関してどのようなことに興味や関心があるのか理解を深めさせる。</li> <li>(項目の用紙を各グループに配布)</li> <li>・質問の分類するために議論をする課程を【思考】【判断】として評価する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちが知りたかったことは、どのようなことであったか、グループ化したこととの関連性を考えさせ【思考】として評価する。</li> <li>【記録用紙2】を配布し、一部提出用とする</li> </ul>
まとめ	<p>インタビューから新たにわかったことや感じたことの整理をする</p> <p>働くことについて新たに感じたことについて整理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの学習から「働くことと健康」について新たにわかったことや感じたことなど学習の深まりについて各自に整理させ【知識】【思考】として評価する。</li> <li>・1年次の学習やインターンシップ・アルバイトなどの経験に加え、本単元の学習により新たに職業について感じたことについて考えさせる。</li> </ul>